様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：２４７２０３０３

研究課題名（和文）近代日本における植民地博覧会の研究基盤情報の整理と分析

研究課題名（英文）Research about colonial exhibitions in Modern Japan

研究代表者
伊藤　真実子（Ito, Mamiko）

学習院大学・付置研究所・教授

研究者番号：４０６２６５７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦前に日本国内外で開催された植民地博覧会、博覧会における植民地展示を調査、考察した。助成期間中は、福井憲彦監修、伊藤真実子・村松弘一編『世界の蒐集－アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』（山川出版社、2014年）を編纂、「1931年パリ国際植民地博覧会」を執筆した。「植民地と博覧会－1930年代の日本を事例としてー」（帝国史研究会例会、2014年3月15日）、国際シンポジウム「近代日本と観光旅行－絵葉書と博覧会」にて、「博覧会と観光－1930年代の博覧会を事例として」（2015年5月18日、学習院大学）、「近代日本と博覧会」（2016年11月8日、ケンブリッジ大学）を報告した。

研究成果の概要（英文）：I focused on colonial expositions and exhibitions about colonies from 1868 to 1945. I co-edited, “Collection of the world. Museums, Exhibitions and Sightseeing about Asia”, Yamakawa shuppansha , Tokyo,2014.,and wrote an article in this book “1931 International Colonial Exposition in Paris”. I talked about “Colonies and Exhibitions” at a regular meeting of workshop for imperial history.(May 15th,2014). In 2015,I organized an international symposium “Sightseeing tour and Modern Japan; Picture postcards and Exhibitions” and talked about “Exhibitions and Sightseeing; a case study of exhibitions in 1930's”. I had a lecture about “Exhibitions in Modern Japan” at Cambridge University, in November 8th 2016. It focused on how colonies and disputed area were exhibited at domestic exhibitions in 1930's.

研究分野：日本近代史

キーワード：植民地博覧会　国際博覧会　日本近代史

１．研究開始当初の背景

日清・日露戦争を経て植民地を獲得して以降、台湾、朝鮮などの植民地が博覧会で展示され、植民地をテーマとした博覧会が開かれた。また、植民地でも博覧会が開催された。本研究は、国際博覧会、国内での博覧会における植民地の展示、および植民地での博覧会に関する情報基盤の作成および分析をおこなうものである。これまでの博覧会研究では、万博および国内で開催された博覧会が研究の多数をしめ、植民地に関しては、博覧会の一画をしめる展示、娯楽などという評価であり、博覧会研究の一項目という扱いであった。

万国博覧会は、1851 年にロンドンで第１回が開催され、当初は国家間の産業品の展示競争の場であったが、やがては開催国、参加国を問わず、帝国主義と植民地の関係を表すような展示が増え、帝国の展示、帝国の祭典としての意味を持つようになり、帝国の領域を、植民地を展示することで観客にアピールするようになっていった。

日本政府も、1867 年パリ万博への幕府参加、1873 年ウィーン万博への明治政府の参加以降、各地で開かれる万博に積極的に参加していった。国内では、1877 年に第 1 回内国勧業博覧会が上野公園で開催されるなど、国内の各地でも数々の博覧会が開催されていった。日清戦争後に開かれた第 5 回内国勧業博覧会では台湾館が建てられたが、これ以降の国内で開催された博覧会では、台湾館の他、朝鮮館、満蒙館、樺太館、南洋館、拓殖館などが建てられた。また、海外で開催された万博に日本政府が参加する際には、台湾や朝鮮、満州からの出品物が日本の敷地内で展示されるようになっていった。このような植民地に関する展示、館は当時の人気展示、パヴィリオンで、博覧会には欠かせない要素となっていき、植民地をテーマとした博覧会、または植民地で開かれる博覧会も開催されるようになった。

万国博覧会、国際博覧会に関する研究も年々増加していったが、本研究では博覧会における植民地展示、植民地をテーマとした博覧会などを対象とし、博覧会と植民地の関係の全体像を得るべく研究基盤となる情報の整理をおこない、植民地博覧会、および植民地と博覧会を対象とした博覧会の詳細な調査と研究を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は、植民地博覧会の研究基盤となる情報の整理と、その傾向分析を行い、日本の植民地政策および、当時の植民地に関する国民への啓蒙、宣伝活動から植民地博覧会、博覧会における植民地展示の特徴を解明することである。

万博での植民地展示は 1880 年代には始まっていたが、やがては 1931 年にはパリで国際植民地博覧会が開催された。一方、日本でも日清戦争後の 1903 年第五回内国勧業博覧会で台湾館が建てられ、1912 年に上野で拓殖博覧会が、1913 年に明治記念拓殖博覧会が大阪で開かれたように、植民地をテーマとした博覧会は、欧米に比べても早い時期から開催された。また、時局にあわせて、朝鮮館、満蒙館、南洋館などが建てられていった。

博覧会研究の傾向として、議論が一つの博覧会に終始してしまいがちであったことから、本研究では、一つの博覧会を詳細に調査、研究するのはもちろん、複数の博覧会について、情報基盤の整理をすることで、総合的に戦前の植民地政策と政府の宣伝、啓蒙活動と博覧会について考察する。また鳥瞰するからこそ解明できる時局との同時性または、相反する動き、また当時の内閣、関係省庁などの方針、拓殖関係者（政府および民間企業、団体も含む）の方針などとの総合的な考察を試みる。

３．研究の方法

研究の方法として、主に以下の二つの方法をとった。

第一に、朝鮮、台湾、満州で開かれた博覧会の研究基盤の整理とその傾向分析をおこなうため、主な調査資料を各博覧会の事務報告書、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所、国立公文書館などの公文書とした。それをもとに各博覧会の開催経緯を詳細に調査した。開催経緯（誰／どの機関が提唱し、推進したか）、開催規模（敷地面積、開催期間、予算、入場者数）、展示（展示分類の区分の仕方、区分の数、博覧会で建てられたパヴィリオンの種類、数、配置）など、必須調査項目を決定し、その情報を収集し、各博覧会で比較できるようにデータ化することとした。

第二に、欧米の万博、および植民地博覧会の研究基盤情報の整理とその傾向分析では、1931 年パリ国際植民地博覧会のような海外で開かれた植民地博覧会を対象に、植民地展示の内容構成や、日本が参加ないし不参加を決定した経緯を、分析、調査した。日本の外務省外交史料館の公文書や当時の新聞・雑誌記事、関係者の日記や書翰を調査し、海外の博覧会については、各国の公文書館に残る事務報告書、新聞・雑誌記事を対象に研究、調査をおこなった。

また、海外で開催された博覧会での日本の植民地展示に関する情報基盤の整理をおこなうため、開催規模（参加国数、日本展示・日本館の敷地面積、開催期間、予算（全体および日本政府）、入場者数、各国の植民地展示状況（展示構成、規模）、日本の参加状況（展示物構成、出品点数、関与した団体、政府機関）など必須調査項目を決定し、その情報を収集し、各博覧会で比較できるようにデータ化することとした。

４．研究成果

平成 24 年度は、欧米の植民地博覧会については、1931 年にパリで開催された国際植民地博覧会についての調査をおこなうためにパリに出張し、会場となったヴァンセンヌ

の森、当時のパヴィリオンで現存する植民地博物館（当時）、公文書、雑誌記事などを調査し、「1931 年パリ国際植民地博覧会」を執筆した。日本政府は、この博覧会に当初は参加予定であり、会場での敷地まで決定していたにもかかわらず、なぜ参加しないことへと決定を変えたのか、という論点から取り組んだ。また、パリ万博におけるアジアからの出品物や、1931 年国際植民地博覧会の出品物を収蔵しているケ・ブランリー美術館、ギメ美術館で調査をおこなった。

また、近隣アジアからの産物の展示について、展示の仕方の系譜の調査と、近代との比較をおこなうため、江戸時代中～後期の博覧会のようなもの（薬品会）から明治初期の博覧会について調査し、日本洋学史学会例会およびパドヴァで開催された国際薬学史学会にて報告した。

平成 25 年度は、アジアからのモノ、アジアを博覧会や博物館でどのように展示するか、されたのか、人々はそれをどのように見ていたのか、とりわけ植民地化の前後ではいかなる変化があったのか、ということを対象にした、福井憲彦監修、伊藤真実子・村松弘一編『世界の蒐集－アジアをめぐる博物館、博覧会、海外旅行－』（山川出版社、2014 年）を編集、刊行した。その中で、前年度に調査した「1931 年パリ国際植民地博覧会」を執筆した。「はじめに－ものから見る世界」では、近代における博物館、博覧会の特徴と、近代化のなかで可能となった海外への直接体験がもたらすもの、とりわけ近隣のアジアに対する視線、展示を総論としてまとめ、本書の狙い、全体像を執筆した。

また、3 月には帝国史研究会例会において、主に満州事変以降に本国で開かれた博覧会での植民地および係争地域に関する展示について、「植民地と博覧会－1930 年代の日本を事例として」という題名で報告した。

平成 26 年度は、「ものから見る世界－博物館から考える」の講演を学習院大学で 11 月 25 日におこなった。国立博物館のような公的博物館が、他国（とりわけ隣国）、過去の戦争、（旧）植民地をどのように展示するかといった事柄について、過去から現在の展示、そして現在問われている問題なども対象とした内容で、その報告を加筆、修正した「ものから見る世界－博物館から考える」が、『東洋文化研究』（第 17 号、2015 年 3 月）に掲載された。

平成 27 年度は、学習院大学国際研究教育機構主催国際シンポジウム「近代日本と観光旅行－絵葉書と博覧会－」を企画、主催した。近代日本における観光旅行が、帝国の一員であるという経験の形成の一翼を担っていたこと、また直接の旅行体験をしなくとも、絵葉書や博覧会という疑似体験旅行を通じて、帝国の領域を疑似体験し、博覧会の展示、娯楽を通じて帝国領土に関する知識などを得ることができたことに注目し、これまでの研究者ネットワークを通じて、観光旅行、絵葉書を専門とするポートランド州立大学教授ケネス・ルオフ氏、ラファイエット大学准教授ポール・バークレー氏を招きシンポジウムを開催した。ルオフ氏による「The empire of Mobility: What Postcards tell us about the Empire of Japan」と、バークレー氏による「絵葉書を史料とする研究の方法について」とともに、産業振興のために観光が政府の推進事業となった 1930 年代に本国で開催された博覧会における朝鮮、台湾などの地域の展示について、「博覧会と観光－1930 年代の博覧会を事例として」を報告した（学習院大学、5 月 18 日）。

平成 28 年度は、博覧会における植民地展示と戦況との関係を中心に調査研究を行い、報告した。とりわけ 1920 年、30 年代において、時局柄、増えていく戦争展示と係争地域（植民地）の展示について、1935 年国防と産業博覧会や、1938 年国民精神総動員国防大博覧会、同年支那事変聖戦博覧会を対象に調査、研究した。その成果を「近代日本と博覧会」として、ケンブリッジ大学アジア・中東学部「日本帝国の崩壊と戦後東アジアにおける正当性獲得に向けた闘争」プロジェクトで、11 月 8 日にケンブリッジ大学にて報告した。この内容については雑誌論文を執筆中で投稿予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

（１）Mamiko Ito, “Natural History and Amateur Scholars in Japan from the Seventeenth to Nineteenth Centuries”, 『19 世紀学研究』（第 11 号、2017 年 3 月）、査読無、17-24 頁。

（２）伊藤真実子「ものから見る世界－博物館から考える」『東洋文化研究』第 17 号(2015 年 3 月)、査読無、377-390 頁。

〔学会発表〕（計　7 件）

（１）伊藤真実子「近代日本と博覧会」、ケンブリッジ大学アジア・中東学部「日本帝国の崩壊と戦後東アジアにおける正当性獲得に向けた闘争」プロジェクト、2016 年 11 月 8 日、「ケンブリッジ（イギリス）」。

（２）伊藤真実子「江戸時代の蒐集文化――木村兼葭堂と好事家」、シンポジウム「クンストカマー　―世界の蒐集とエクリチュール」、2016 年 3 月 28 日、「新潟大学（新潟県・新潟市）」。

（３）伊藤真実子「博覧会と観光－1930 年代の博覧会を事例として」、国際研究教育機構主催国際シンポジウム「近代日本と観光旅

行－絵葉書と博覧会－」、2015 年 5 月 18 日、「学習院大学（東京都・豊島区）」。

（４）伊藤真実子「ものから見る世界―博物館から考える」、第 86 回　東洋文化講座シリーズ「アジアの未知への挑戦―人・モノ・イメージをめぐって」、2014 年 11 月 25 日、「学習院大学（東京都・豊島区）」。

（５）「伊藤真実子「植民地と博覧会―1930 年代の日本の事例から」、帝国史研究会例会、2014 年 3 月 15 日、「武蔵大学（東京都・練馬区）」。

（６）Mamiko Ito:The History of Japanese Medical Learning in 18th-19th Century　－ Natural History and Exhibitions.,The 43rd Congress of the International Society for the History of Medicine,2012 年 9 月 15 日、「パドヴァ（イタリア）」。

（７）伊藤真実子「洋学と博覧会、博物館　－平賀源内、木村兼葭堂、成島柳北－」、日本洋学史学会例会、2012 年 7 月 8 日、「電気通信大学（調布市）」。

〔図書〕（計１　件）
福井憲彦監修、伊藤真実子・村松弘一編『世界の蒐集－アジアをめぐる博物館、博覧会、海外旅行－』（山川出版社、2014 年）所収。
伊藤真実子「はじめに－ものから見る世界－」、3－14 頁。
伊藤真実子「1931 年パリ国際植民地博覧会」、229－254 頁。

〔その他〕
ホームページ等
http://warcrimesandempire.com/blog/2016/11/08/japans-modern-history-through-international-exhibitions-a-guest-seminar-with-dr-ito-mamiko/

６．研究組織
(1)研究代表者　伊藤　真実子
（Mamiko Ito　　）
学習院大学・国際研究教育機構・教授
研究者番号：40626579